

---

# らき すた 我が家に大集合! ? ~もしもの世界~

十波 悠真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らき すた 我が家に大集合！？ ～もしもの世界～

### 【Nコード】

N2341F

### 【作者名】

十波 悠真

### 【あらすじ】

これはタイトル通りもう一つの世界、“らき すた 我が家に大集合！？”のもしこうだったらという世界……。

ーもしこなたが恋人だったらー

トクトクトク…。

シュワー…。

くいつ…。

ゴクゴク…。

ふー。

やっぱり朝はコーラに限るなあ…。

ーピンポーン。

「……？」

いったい誰だ？

コーラを手を持ったまま玄関まで行く。

するとドア越しから明るい声を受ける。

「おい椿君ー！！」

この声は…。

いつもは時間ギリギリに鳴るはずのインターホンが二十分前に押されることに疑問を抱いたがとりあえず出るか。

ドアを開ければ日差しと同時にこなたののほほんとした顔が目覚めの朝を示していた。

「おつはよ、椿君」

「おう、今日はやけに早いな」

雪でも降るんじゃないかと一瞬考えてしまったのは失礼だろうか。

「むー、なにその雨でも降るんじゃないかって表情は」

「べ、別にそんなは顔してないだろ。　　んで？　今日は何でそんな早いんだ？」

ちよつとずれたが確信を突かれたのを隠すようにこなたの意図を聞いておく。

ま、どうせなんとなくなんとか言いそうなんだが。

「えーつとね…椿君に一秒でも早く会いたかったから…」

「ぶっ！？」

臭いセリフを堂々と言うので思わずコーラを吐いてしまう。

「冗談だつてば　　ね、早く行こ」

コ、コノヤロー…！

後で覚えてるよ…！

「あー…、あまりのサプライズだったんでこっちの用意ができてないんだ。

すぐ着替えてくるから少し待っててくれ」

残ったコーラを飲みほして俺はリビングに行こうとする。

「んじゃ私も着替え手伝ってあげるね」

「ちよつと待った！」

俺はこなたが靴を脱いであがろうとするのを引き止める。

「えーっ、なんでー？私達付き合ってるんだよー？」

そういう問題じゃないだろ。

「一人でやったほうが早いんだよ。だからここでー」

「ズボンのチャックは私がしてあげるからさ」

「なおさら駄目だろ！」

「ところでさ、昨日のアニメ見た？」

「すごく面白かったよねー」

緩い声でいつも通りに俺の彼女は話す。

だが彼女といっても付き合ってたまだ一週間しかたっていない。

七月になって俺から告白したのだが

情けないことに俺は人生で始めて付き合うので最初は多少ギクシャクしていた。

でもこなたと話すときはとても面白くて今ではこういう何気無い会話が俺の一日で一番の楽しみになっている。

まあ話すことと言ったら七割がアニメなんだが俺も好きだから飽きはしないだけだね。

そして残りの三割は他愛もない普通の世間話だ。

好きな奴と一緒にいられてこんな毎日を過ごせることは幸せなことだろう。

少なくとも俺はそう思う…。

しかしこなたと付き合うのには多少のリスクが生じてしまう。

例えばこなたの外見だ。

こんななりでも一応高校三年生なのだが、初めて手を繋いで街中を歩いていた時ロリコンやら子供好きと陰でボソボソと言われている…。

そしてその日には警察に通報されたこともあったなあ…。

あのあとどれだけ誤解を解くのに必死だったか…。

学校でも噂になって気まずいっただらありやしない。

でもこなたの笑顔を見たらそんなのどうでもよくなる…。

一番大切なものがそこにあるからなのかな…。

「ねえねえ椿君」

「ん？なんだ？」

「ワガママ言っていいかな」

「……………」

またこいつは唐突に…。

いたずらっぽい顔をしているのが気になるが、まあ聞くだけ聞いてみよう。

「…なに？」

「キスしよ」

…無理です。

「付き合ってるんだからキスぐらいはいいよね？」

こなたは顔を覗きこんでくる。

「い、いや、それはちよつと…」

道のと真ん中ではさすがにできないのでこなたが文句を言うのを覚悟して拒んだ。

しかし、

「……………」

「……………」

あれ？何も言わない…。

こなたはうつ向いたまま歩く。

そして上目使いから、

「椿君は…、キスしたくないの？」

攻撃力MAXの言葉で攻めてくる。

「う…それは……………」

言葉に詰まる。

し、正直言つとこなたとはキスしたい。

でもなんか恥ずかしいし

キスってどうやるかわかんないし…。

ーってそんなんだから俺はいつまで経っても…。

こなたの緑の瞳に涙が見えた。

こ…、こうなったらやるしか……………！

俺は強引にキスの形にもつていこうとするが、

「やっぱりやーめた」

「…なっ!？」

ひょいとかわされたあとにこなたは一步前が出る。

「こんなに彼氏が困ってるのに無理矢理させるのはやっぱり違う気がする…」。

ファーストキスは椿君がしたいときにするよ」

笑っているように見えるがこなたの肩は震えていた。

それが何故かはわかっていた。

なにも俺だけがビビってるわけじゃないんだ。

こなただってさっきのことを言うためにどれだけの勇氣を必要だったか…。

“断られたらどうしよう…”

“こんなこと言って嫌われないかな…”

そんな感情がこなたの頭では渦巻いていただろう…。

…… 本当に俺は情けないよ…。

ただ優しいだけのダメ人間だ…。

だから…… 変わらないとな…。

静かにこなたに近づいて俺は抱く。

こなたの顔が俺の胸に埋まる。

息がかかる零距离になって今こなたが顔をあげたら相当恥ずかしい状況になってしまう…。

でも今ならいい感じでいける気がする…。

「…っ、椿君……？」

だんだんとこなたの眼がアップしていき、そっと優しく頬にキスをする。

「……へ？」

唇を離してこなたの顔を見ると呆氣にとられていた。

そんな様子を見て俺は今頃自分がしたことを恥じて慌てて距離をとった。

甘酸っぱい雰囲気は空気を彩る。

「え、えと…、ゆ、勇気がでるまでさ……これで我慢してくれないかな……？」

「……椿君」

あ…やばい…

顔が真っ赤になったのが自分でもわかり、俺はふいっと顔を背ける。こんな赤くなつた顔を見られなくなかつた。

沈黙の一拍が発しているところなたは腰に手を回して抱き返す。

「こ、こなた…？」

返答はなくこなたはそのまま顔を近づけて…。

ーチチュッ。

こなたの唇が左頬に触れる。

「………は？」

予想外のカウンターに俺は一人で漠然としていた。

「椿君も今はこれで我慢してよね」



な、な、な…！？

こなたは先に走り出して振り返る。

「早く行かないと遅刻しちゃうよー」

からかうように舌をペロツと出す。

あ、あんにゃろー！

「こなたー！！！」

俺は小さな背中を追いつける。

青い髪が長く流れて甘いシャンプーの匂いが広がる。俺はとてもか弱そうに見えるその体を守ってやりたい…。

そしてずっと一緒に歩いていきたい……。

それが今の夢なんだ……。

――どうかこんな日々が続きますように――

～ f i n ～

## もしかがみがオタクだったら

「こなたー、今から本屋寄らない？」

帰りの支度をしていると隣のクラスのかがみがニコニコしながら教室に入ってくる。

「か、かがみまた行くの…？」

昨日行ったばつかなのでお金が少しばかりピンチのこなた。

「チエツクよチエツク。なんか新刊が出るかもしれないじゃない」

「けど2日続けて行ってもあんまり意味ない気が…」

引っ込み気味のこなただがかがみはそんなことお構い無しだった。

「いいからいいから　じゃ早く行きましょ。」

あ、椿君も来る？」

かがみはこなたの横の席にいる椿君も誘う。

「俺は財布空っぽだよ…」

椿君は財布を逆さにしながら言う。

そういえば昨日椿君は本屋に寄ったあとでかがみにゲーセンとかに付き合ってたんだっけ…。

「ふーん、それじゃ仕方ないわね…」

みゆきもつかさも用事があるって言うってたし二人で行くか…。

「でもかがみ実は“こなたと二人きりで嬉しい”とか思ってたりするんじゃないの？」

こなたはからかうようにニマニマ顔で言う。

「ち、違っわよ！　別にそんなこと考えてないんだからね！」

「ふーん（ニヤニヤ）」

「ほ、ほら、さっさと行かないと帰るのおそくなっちゃうじゃない！」

かがみは先に教室を出る。こなたもそれに続くように教室から姿を消した。

「あ、このフィギュア可愛いー！」

こなたは店頭に並ぶフィギュアの一つに注目する。

「ホントだ。特に犬耳にスク水着てて銃を撃つてるとこなんか萌えるわよねー」

確かに萌えるポイントはかがみの言う通りでこのフィギュアのアニメは個人的にとっても好きだ。

けどお金が足りないな…。

こなたは値札を見ると頭をガクツと落とす。

やっぱり無理だ…。

諦めるしかない…。

「よし、私買っちゃおっと」

……えっ？

普通に言うかがみにこなたは絶句した。

かがみは店員に頼んで同じフィギュアを奥から取ってきてもらう。

「こちらでよろしいでしょうか？」

「はい」

「えー、7800円になります」

か、買っちゃうんだかがみ…。

バイトしてないのに大丈夫なのかな…。

こなたはハラハラしていると、店員はオタクの心を揺らすことを言う。

「あ、この商品は限定版と通常版のフィギュアがありますがどうなさいますか？」

でたな“限定版”。

オタクなら必ず“限定”という言葉に反応を示す。

「え…、どうしょ……」

やはりかがみは二つの商品を前にして悩む。

かがみはいつたいどちらを選ぶか…。

オタクなら限定版を買うのだから値段は12500円、とても簡単に手がつけられる代物じゃない。

ならかがみはやっぱり…。

「じゃあどちらもお願ひします」

ふおっ！？ どっちも買っちゃうの！？ それじゃ一般的なオタク越えちゃってるよ！？

かがみの大胆な決断にこなたはあんぐりと口を開けていた。

かがみはそのうちにちゃっちゃと会計をすませてきた。

「ん？ こなたどうしたの？ そんなぽかんとして」  
そりやびつくりするでしょ……。

「いやー買った買った」

「疲れたあ……」

こなたは帰りの電車の中で勢いよく椅子に座る。

かがみも両手にどっさりとフィギュアやら漫画やらを足元に静かに置く。

まさかただ本を買いに來ただけのはずがこんなに寄り道してお金使  
うなんて思いもしなかったなあ…。

かがみは多少後悔する。

「かがみー、お金大丈夫？」

「ああー、さすがに買いすぎたわね。 どうしょ……」

「でも私と長い時間いられたいいんじゃない？」

「よ、よくないわよ！」

「おやおやゝ？ やっぱりツンデレは健在ですな」

「ツンデレ言うな！」

私もオタクだからツンデレという言葉は理解できる。  
簡単に言うത്と私みたいな人を言うのだろう。

でも言いたいことが言えない分、辛いだけなのにな……。

「また今度も行こうね、かがみん」

ドクン……。

こなたの笑顔でかがみの心が動く。

あんな顔で言われたらどうしようもないじゃない……。

けどこなただって受験忙しいのにここまで来てくれたんだから少し  
くらい素直にならないとダメよね……。

「ま、また暇な時があったらね。」

それから「

かがみはちよつと俯き、赤くなつた顔で、

「今日付き合ってくれてありがとう……」

かがみはボソツと礼を言ったあとすぐに流れる外の景色を映す。

「え？かがみ、今なんて言ったの？」

こなたは小さい声でよく聞こえてなかったらしい。

「な、何でもないわよ……」

「ふーん、まあいいや」

あくまでマイペースなこなた。

はあ……。

やっぱりこなたが相手だと素直になれない……。

それは私がこなたのことを変に意識してるから……？

また来ようね

いつかそれがあいつに言えたらいいな……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2341f/>

---

らき すた 我が家に大集合!? ~もしもの世界~

2011年8月9日19時17分発行